

家庭科の男女共修をすすめる会

会報

'95 秋

連絡先

東京都渋谷区代々木2-21-11

婦選会館内

〒151

振替〇〇一九〇—一九一八九一

発行 一九九五年十月二十一日

NGO日本女性大会へどうぞ

九月に北京で開かれた第四回世界女性会議で新しい行動綱領が採択され、男女平等へ向けての運動は新しい段階に入りました。同時に開かれたNGOフォーラムには国際婦人年連絡会(IWYLG)も積極的に参加、そのメンバーとして家庭科の男女共修をすすめる会も活動しました。(4~9ページ参照)

とき 十一月二十二日(水)

午前十時三十分~午後四時

ところ 日比谷公会堂

内容

○基調報告 10年のあゆみと今後の方向

中村紀伊さん 中村道子さん

○来賓あいさつ(首相、モンセラさんら予定)

○映像構成(立体映像)

連絡会ではこれに先立ち、NGOフォーラムの準備の意味も含めて、NGO日本女性・6月会議を開催しました。(2~3ページ)

十一月には北京の報告を中心に、'85年以降の活動を総括し、今後の運動を語り合う左記の大会を開きます。どうぞご参加ください。

○分野別行動目標の提起

○フロア発言

○決議・宣言

○しめくくりのイベント

・会場にはNGOフォーラムの各種資料や各国の人びとのメッセージが展示されます。

・各地域からの積極的な参加が求められています。入場は無料です。

もくじ

NGO日本女性大会へどうぞ	(1)
NGO日本女性・6月会議	(2)
NGOフォーラム報告	(4)
夏の各集会から	(10)
家庭科教育学会	(10)
第30回家庭科連夏季研究集会	(10)
95 Weフォーラム	(11)
母親大会	(11)
日教組関東ブロック研究講座	(12)
タイのアグリビジネス見聞記	(12)
世話人会報告	(13)
別学が残る中学家庭科	(14)
マスメディアは共修家庭科をどう	
取り上げたか	(16)
文部省、高校長協会のうごき	(17)
活動のまともに向けて	(18)
95年をふりかえる会へどうぞ	(18)

参加ご希望の方は和田典子世話人にご連絡

ください(なるべくはがきで、お早めに)

〒151 東京都渋谷区西原二丁目四一〇

☎〇三—三四六六—二六六五

国際婦人年連絡会

21世紀に向けて

NGO日本女性・6月会議

九五年六月二十四日(土) 於主婦会館ホール

この10年間の「連絡会」の取り組み状況

民間行動計画の点検を中心にしたこれからの
NGO活動の重点目標について――

報告と協議のための会議を開催しました。

当日のプログラム

○分科会(10時30分～12時30分)

1、学歴と社会参画――女性の生き方探し

2、高令社会と介護――人間らしく生きる
ために

3、女性の雇用・労働条件はどうなってい
るか

4、21世紀へ 開発・環境・平和――女性
たちはなにができるか

○全体会(13時30分～16時)

・あいさつ(政府・東京都)

・基調報告(国際婦人年連絡会の活動の10年
とこれから)

・各分野からの報告(政策決定参加、教育・
マスメディア、労働、家族・福祉、平和・国
際協力、ユニフエム)

・フロアからの発言(約一時間)

分科会1 学歴と社会参画

――女性の生き方がし

「学歴と社会参画」をめぐる現状について

報告の途中からの参加であった。家庭科の男
女共修をすすめる会の世話人でもある和田典
子さんの「学歴の現状と社会参画」の報告は
一九五一年生まれの私の生きてきた時代を振
り返ることができ興味を持った。例えば、高
校への進学率、一九六五年女子六九%。私の
中学の時のクラスも半数は就職や家事手伝。
集団就職列車の友人を見送りに行った。大
学卒の就職率の推移は、今も二十年前もあま
り変わっていない。学校管理職等における男女
別状況では小学校の女性校長等が増えている。
私の身近な人も管理職でがんばる女性も目立っ
てきた。今は、女性の採用に厳しい状況はあ
るが、徐々に変化してきていることがわかる。

話し合いでは、政界に進出する女性がいま
だに少ない、日本の女性たち高学歴で識字率
も高いのに社会の中でどんな役割を担ってい
るのかなどの意見や疑問が出されたが、やは
り私の関心の高い教育の問題について多く出
された。子どもは、受験、塾、部活と忙しい、
政治問題をタブー視している教師から政治を
学べない、性差別の言動を平気で行っている教
師のなんと多いことか、母親は男の子に期待

・決議提案・採択(決議、申し合わせ、世界
の姉妹へのメッセージ)

参加者は、加盟52団体の会員を中心に延約
四〇〇名と報道関係者で、満員の盛況でした。

〈分科会のようす〉

「学歴と社会参加」の運営は、政策決定参

加と教育・マスメディア委員会の座長(大槻・
和田)が担当しました。

参加者も予測をこえて満員、活発な意見交
換ができ、平常話し合う機会の少ない他分野
からの貴重な発言をきくことができました。

内容の紹介は、次頁をこらん頂きたいので
すが、男性の参加者や女子学生の「現状肯定」
ともとれる発言など、意外な声もありました。

〈全体会のようす〉

午後の全体会では、各分野からの報告に時
間がかかり、フロア発言も協議とまではいか
ず、補足的な報告や主張に終始しました。

内容については、後日発行予定の刊行物で
ご承知頂くはかありませんが、フロア発言で
梶谷さんは「6月会議の決議案の中に『男女
平等教育推進のポストを設ける』ということ
ばが入ったことは喜ばしい、そのための運動
をすすめたい」と述べました。

10年間にわたる民間女性の運動の範囲の広
さといい、参加層の厚さといい、改めて日本

女性のエンパワーメントの凄さを痛感しない
ではいられませんでした。

また「家庭科の男女共修の実現」を手にし
てこの日をむかえることができた喜びは、た
とえようありませんでした。

〈決議〉

6月会議をまとめて採択された「決議」の
うち、教育・マスメディアについての項目
は、(1)、教育・文化政策の基本に差別撤廃の
理念を明記し、男女平等教育推進のポストを
設けるとともに、国際関係の変化に対応して
自己実現の意思決定ができる力を養う教育を
すすめる。(2)、一人ひとりの人格を大事にし
生命の尊厳と他人への思いやりをばぐくむ教
育をすすめる。(3)、女性の学習機会をひろげ
女性の意欲に応える学習の推進のため、地域
の女性会館等の充実整備をはかる。(4)、映像
番組、記事、広告などのマスメディアの制作
過程に、女性の参加を増やし、男女平等と女
性の人権を尊重する内容のものにしていく。

〈世界の姉妹へのメッセージ〉
最後に、第四回世界性会議・NGOフォー
ラム'95に際して、連帯と行動をよびかけるメッ
セージを採択しました。(北京で配布)

和田典子

会場の発言の中では、シルバースト新聞
編集者、介護福祉士の方からの補足的な意見
がありました。

青山和世

分科会3 女性の雇用、労働条件は
どうなっているか

さまざまな職場で働いている参加者から、
働く女性のきびしい実態が次々と報告されま
したが、短大教員の柴山さんの次のような発
言が印象に残りました。

「学生の殆んどが、女性のM字型雇用はよ
いと思っている。高校までの教育に問題があ
る。労働権の確立、労働条件の向上のために
は、主体の形成が必要。教育が重要だ。欧
米諸国では労働権や男女平等について教えて
いる。文部省の中に男女平等委員会がおかれ、
男女平等教育が具体的にすすめられている。」
年金の見直しも話題になりました。現行制
度ではサラリーマンの妻が優遇され過ぎてい
るのではないかという意見が出ましたが反論
もあり、この点で女同志が一致することのむ
ずかしさを改めて感じました。

梶谷典子

(第4分科会には、会からの出席者
はありませんでした。)

分科会2 高令社会と介護

――人間らしく生きるために

ここでは、用意された資料に従っておもに
講義形式で進行しました。

資料としては、介護サービス利用の基本的
流れ、高齢者介護における公費方式、社会保
険方式及び民間保険方式の比較、介護サービ
ス(在宅サービス・施設サービス)の二元化、
ケアマネジメントの確立、社会保険方式の意
義と論点、給付範囲に関する考え方、社会的
コストの推計、成年後見制度の記事(朝日新
聞)について、説明がありました。

磯部幸江

NGOフォーラム報告

北京での第四回世界女性会議と同時に開催されたNGOフォーラムは、北京から車で一時間あまりの怀柔県で八月三十一日から九月八日まで行われ、三万人余りが参加しました。中学校の教室と、敷地内に並んだ小さなテントでのワークショップは大体二時間刻みのスケジュールで、一日四百ほどもありました。家庭科の男女共修をすすめる会からは、十一人が国際婦人年連絡会(IWYLG)のメンバーとして参加、IWYLGは三つのワークショップを開き、すすめる会は「教育・政策決定」部門のワークショップを婦人有権者同盟などとともに担当しました。

ワークショップ報告

テーマ 「日本女性における意志決定と教育のディレンマ」

九月二日一時～二時四十五分まで開かれた。会場は10-M48という中学校の一教室で五十名ほど入ることのできるやせまいものであった。

準備としてはピンク色に蝶の飛んでいる模様のリーフ(英文)表紙は「性別役割分業意

識の克服

内容は

○家庭科の男女共修の獲得

○教科書における男女平等の視点からの取り組み

○マスメディアにおける女性蔑視への抗議

○世界の女性への呼びかけ

このピンクリーフと、IWYLGを紹介するグリーンのリーフを配った。

教室後方には、女性の政策参画に関する写真、側面には、家庭科共修の写真、男女進学率、専攻学科の比較などのグラフを貼った。

そして教科書は、平等教育の視点から、著作者の男女比率、戦争の記述などのページにラベルを貼って展示した。参加者は日本人が多いと思われたので、外国人に対する呼びこみに努力した。

司会中嶋里美氏、半田たつ子氏で定時開会中村道子氏挨拶、半田氏このワークショップの紹介、松浦氏説明(通訳中村氏、奥村氏)和田氏前述(ピンクリーフ)の説明、大槻氏は日本女性の政策参画は選挙権を獲得した一九四六年の選挙では三〇名議員の誕生をみたが、六〇年代経済的に豊かになると女性の社会進出は下った。議員の数も少く、世界で一四九位である。今回改正になった小選挙区制は女性に一層不利であると、社会参加の面か

ら述べた。梶谷氏は、女性の教育レベルを高め、知識、技術を身につけるだけでは不十分である。伝統的役割分担の意識を教育によって、特に男の子の教育によって変えることが必要である。

各国からの意見や質問は次のようなものがあった。

＜インド＞日本と同じく議員数の三〇％を女性にという目標です、めています。

＜ドイツ＞大学へは七〇％の女性が進学するが女性は文科系が多く、技術的な方向は男性が多い。日本ではどうだろうか。

＜阿部＞日本でも進学率が高いが専攻分野が偏っている。

＜アメリカ＞テーマのディレンマとは。

＜和田＞教育はレベルが上ったけれど、政策決定への参加は進まない、そのギャップに日本人としてのディレンマがある。

＜アメリカ＞女性の就職が悪いと聞くが。

＜吉川＞(参議院議員)均等法はあるが、罰則はなく、社会の女性差別はある。女性は結婚、育児などで長く勤めにくい。

＜細川＞女性の社会参加を支援するために十八年間、〇才児からの保育所をつくって子育てを支えている。

＜ケニア＞私は未亡人と孤児の組織から来た。三人の未亡人の連合からはじめた。夫が亡く

なると、夫の兄弟が財産、子ども、未亡人を相続する。それを拒めば家を追い出される。

私たちは運動を始めて、今は政府も認め、仕事を育て子どもを養っていきける。これは男性と対立するのではなく、ロビー活動することによって。

＜モンゴル＞女性差別はアジアに多い。男の子の家庭教育はどうしているか。

＜阿部＞高学歴の母親は家のことができなくても勉強のできることを望む場合が多い。しかし家庭科が必修になって少し変わった。

＜福留＞側壁の共修写真を説明。

最後に松浦氏がいろいろ御意見有難とう。これからも女性の社会参加をのびして行こうと挨拶した。

文責 香川 安野

NGOフォーラムのワークショップで訴えたこと (報告要旨)

国際婦人年連絡会、教育・マスメディア分野では、ナイロビ会議以降の10年間も「民間行動計画」を指標にして女性の地位向上の運動を続けてきました。

その主な目標は、日本社会に根深く残っている「性別役割分業意識」を排除するため、教育・マスメディア分野で有効・適切な行動

を追求することでした。とりわけ次の三つを重点課題としてかけ、行動してきました。

(1) 学校の教育課程から男女差別を撤廃すること。特に家庭科の男女共修を小・中・高全ての段階で、完全に実現すること。

(2) 教科書を、男女平等をすすめる観点から洗い直し、関係者に改善を求めること。

(3) マスメディアにおける女性に関する報道・描写から、性別役割や女性の人権侵害を撤廃するよう企業や関係団体に要求すること。

これらの具体的行動については、配布したリーフレットに詳しく述べていますが、運動は徐々に成果をあげ、進展しつつあります。

近來、日本は引き続いて経済成長をつづけ女性の教育や、社会参加の機会も広がりました。しかし「性別役割意識」や「男女観・两性関係」にはまだ古いものを残し、女性の地位向上を妨げています。私たちは経済的な発展が、男女平等を約束するものではなく、女性の地位向上には、独自のとりくみが欠かせないことを痛感しています。

和田典子

☆NGOフォーラムでは、ワークショップのほかにさまざまなイベントも行われました。中学の敷地の中には、二百人ほど入る大きなテントもつくられていました。アフリカ、アジア太平洋、中国等地域ごとの名前がつけら

れた「友情テント」です。そこでは各地域からの参加者がそれぞれ特色あるパフォーマンスを行っていました。

友情テントのイベント

ゆかたショー

9/2、午後3:00～5:00

IWYLGに所属する「家庭科の男女共修をすすめる会」と「家庭科教育研究者連盟」のグループの参加者が、「アジア太平洋友情テント」のイベントに、日本の文化を紹介すべく「ゆかたショー」を企画・参加し、見事なパフォーマンスで、大成功をおさめた。

『ゆかたショー』は、開始前から、様々な国柄の参加者が集まりはじめ、「ようこそ!」という、進行・解説の藤本さんの力強く、かつさわやかな語り口で始まり、通訳は中村道子さんで進められた。

まず、「ゆかた」の解説(西原さん)。「ゆかた」は日本の伝統服「小袖」を源流とし、現在でも庶民の日常着として、蒸し暑い我国で、湯上がり着として愛される等、広く使われている単長着です。それは国際的にみても、機能性・文化性ともに誇るべき価値を備えています。例えば、木綿の白地に藍で染め抜いた大胆な柄の着尺地(反物)を袖・みごろ・おくみ・衿の4部分に切り離すだけの裁ち方で、それらの4つの布を縫合すれば

完成し、着付けによって誰にでも合わせることで、付き、付属の帯も一本の布であり、解体してつなぎ合わせれば、元の反物になり、他に転用できる等々です。

また、日本では、女性が木綿を育て、糸↓布↓衣服の仕立て等の全工程を長い年月にわたって担ってきました。女性は、衣服文化の創造・継承・発展の担い手であり、「ゆかた」は、女性が創り出した典型的な文化財といえます。」

続いて、浴衣姿の四人のモデル(梶谷さん・半田さん・斎藤さん・丸岡さん)が登場。いよいよ「ゆかた」製作へ。和田さんが、中央のテーブル横で、藍染の反物を高々と掲げ、早速、裁ち方を披露。一枚の約11mの長い布を、袖↓みごろ↓おくみ↓衿の順にたたみ、4つのパートに裁っていく。

そして、四人の縫い方(阿部さん・西原さん・本橋さん・安田さん)の皆さんが、会場中央のテーブルで、さすが、現場で慣れた家庭科教師たちの、手際のよい見事な手仕事振りを、汗を拭う暇もなく、披露していかれた。

その間、浴衣姿の四人のモデルの皆さんは、うちわを片手に会場内を廻りながら、交流する一方で、次々と申し出る外国人の希望者に「ゆかた」の着付けをしながら、英語を飛び

交わせ、まさに国際文化交流に、楽しみながら、大活躍。

縫い方の皆さんは、わずか三十分という短時間に、見事「ゆかた」を完成し、拍手喝采を浴びました。最後に、持参した「ゆかた」を記念品として韓国等にプレゼントし、「ゆかたショー」の幕を閉じた。

『ぜひ、「ゆかた」を販売して欲しい!』という声をあちこちで聞き、参加者の反響の大きさに、新ためて日本の伝統服、着物の素晴らしさと、それ以上に『ゆかたショー』を企画し参加された出演者の皆さんの大奮闘に、心から感動。盛大な拍手を送りたい。

福留美奈子

参加者の感想

国際連帯のためには……

半田たつ子

十年前のナイロビと比較して、会員がまとまり、それぞれの役割を果たせた。「連絡会」で中心的に活動してこられた和田さんのご努力に負うところ大で、まず感謝したい。

私たちのワークショップで、ドイツの女性から、「教育は、発展途上国の女性の地位向

上に役立つが、先進国では必ずしもそうでない」との意見が出、梶谷さんが「教育の内容を問う必要」を発言した。私はこれこそキイだと思ったが、通訳を介しての論議では深められず残念だった。今日そして明日、英語を使いこなすことは、国際社会で交流し連帯する前提条件だと痛感した。この日のために二年前から始めた私のおべんきょうは少しは生きて、プログラムの中から興味あるテーマを選び、一人で回った。独り立ちのスタート地点に立ったよううれしかった。大挙して出かけた日本女性。ナイロビの仲間、国際親善の場と考えているのかと思う場もあったが、参加による開眼に期待したい。

一步一步前進

藤本了江

国際婦人年の世界的運動の中で、男女役割分業意識を乗り越え、人間の尊厳を守るためには、公教育における女性差別は許さないと二十年間、「家庭科の男女共修運動」を闘い続けた事が評価された北京会議であった。

「日本女性における意志決定と教育のディレンマ」のワークショップで、古い生活スタイルから抜け出すためには、学校で男女平等の学習と体験を重ねる事が基礎である。と立

証できた。学問を身につけたから就職し易いというのは後進国の段階で、ドイツや日本など先進国では、大学の選択コースに男女差がある事が就職難を生んでいる。人生計画が主體的になり、男女平等の意識を女性のものにした時、始めて就職も可能になるだろうと討論は進んだ。

日本社会は資本の論理にがんじがらめだけれど、男女機会均等法に法的な力をつけさせる女学生の手い、男女賃金差別を許さない闘いの報告は、必ずや固い扉をこじ開ける力になるだろうと予想させるものであった。

参加の感想

阿部八重

時差ほとんどなし、気候も日本とはほぼ同じ、通訳もつく、と誘われて、つい行く気になっ

て行ってみたら、錚々たるメンバーなので、私などは場ちがいのような気がした。「政策決定と教育」のワークショップで、ドイツの教育の男女差が日本と似ていると思った。つい勤めていた頃の地金が出て、日本の教育の男女差を説明してしまったが、現状解説だけでなく、家庭科の男女共修まで話せばよかったと反省している。イベントのゆかたの披露では、もっとゆかたを持っていって、

外国の人に着せて写真をとったりして交流すればよかったと思う。

朝六時起床、午前一時・二時就寝、むし暑く、歩く歩くの毎日。朝はパンとミルク、夜はチキンラーメン、昼だけグループで中華料理、水もままならぬ状態。腰かけると、ついうとうとするようだったのに、帰国してからこの身の軽さは何だろう。先輩の方々の活躍ぶりに刺激されたのか。歩く歩くのせい。

☆IWYLGからの参加者は、赤、白、水色、緑のハンカチを持ち、各国の参加者の署名を求め、日本の女性への簡単なメッセージを書いてもらいました。(11月22日の集会で展示)

NGOフォーラムに参加して

福留美奈子

初めての世界女性会議参加。世界中から集う、各国の女性たちのすごい人数とパワーあふれる雰囲気、胸がときめき「女性が力を合わせれば、平和」を確信した開会式。

ピースメントでは、浴衣姿の人たちと共に平和首頭にのり、踊りながらの平和アピール。各国の参加者へ、片言ながら、交流しつつ、世界へのメッセージのリーフ配布とハンカチに連帯のメッセージとサイン集め等々の参加。ワークショップでは「男女平等教育」「日

本女性における意志決定と教育のディレンマ」等々へ参加。共に、わずかではあるが家庭科の男女共修の経過と成果が報告された。そして、アジア太平洋友情テントへの参加。各国のワークショップ参加の時間的余裕がなく、とても残念であったが、各会での積極的な発言・交流から、世界的レベルでの一層の共生・協力・共同の重要性を実感した。

男女の役割の変更を

梶谷典子

「教育によって男女の役割を変えよう」と各国の人びとに呼びかけた、NGOフォーラムに参加しました。

ワークショップでも発言しましたが、背中にゼッケンをつけてうったえることを考えました。会からの参加者全員がGENDER R OLESという字の上に赤で大きなXをつけたゼッケンをつけました。今回はゼッケンなどをつけた人はあまりなくて、これはかなり人目を引いたようでした。「賛成だ」という声を何度もかけられ、しばしばカメラを向けられました。中国人はこのことばを知らないのか(中国人の参加はとも少なかったのですが)、二度意味をたずねられ、ことばの意味を説明するとともに家庭科共修のこと

もう少し話すと大いにつて、「いいことだ、がんばってほしい」と言われました。

「男女の役割の変更」は女子差別撤廃条約でもうたわれていますが、コペンハーゲンやナイロビの集会よりも、今回の方が全体によく取り上げられていたようで、いくらか心強く思えました。

NGOフォーラムに参加して

安野 礼

私たちは、GENDER ROLSと二段書きし、赤で×印を入れたゼッケンを背中に付けることにした。広い会場を歩くと毎日必ず何人かの外国人が私たちの背中をカメラに収め、また話しかけてくれた。たしかにこのゼッケンは交流のチャンスを与えてくれた。家庭科は、男女平等意識のある国（デンマーク、米）では学校教育の中で必修または選択で男女の別なく学習する。平等意識が薄く学校教育にもないネパール、平等意識（女性が働いていることから来る）はあるが教科としてない中国（体育は高校までいっしょに行われている）など家庭科教育も国によって異なることを感じた。教育の根底にある男女平等意識それに基づきさまざまな行動計画がこの会議を機に各国で実現してほしい。

白い杖の視力障害の人、車椅子の人など見

NGOフォーラム参加の感想

香川敦子

私のように日本の片隅にひっそりと暮しているものにとっては、世界女性会議NGOフォーラムに参加することは、まごまごするばかりでありました。

地球の大きさ広さ—あれだけの色々な国と人を乗せている—そして狭さ—こんなに集まって顔と顔を寄せ合うことができる—と複雑な思いがしました。

十年に一度でもNGOの立場で集り、それぞれの思いを述べあうことは貴重です。

主催国中国は隣国であります。そして私も「中国人？」ときかれるほど似ていますが、風土、歴史のちがいは大きいと思いました。北京に足をふみ入れて、行きかう人、お店、デラックスなホテルと民家などその中にアンバランスを見ました。

さまざまな異いの中の共通点、そして共通する発展の方向を見定めるよい機会であったと思います。

☆IWYLGのツアーは八月二十八日に出発、上海を見学して二十九日から北京に滞在し、九月四日に帰国しましたが、中嶋世話人は八日のフォーラム終了までいろいろなワークショップに参加しました。

かけたが、手話をしている姿は何処にも無かった。手話を勉強している私にとってこの会議に聾の人が排除されているとしたら問題だと思ふ。

北京—一九九五・九・二

私のカメラ・アイ

本橋靖子

八日間の中で最高に感動と共にカメラにおさめたところをご紹介します。私たちのワークショップでの和田典子さん、梶谷典子さんの発言は二十余年の運動の重みをもって響いた。二人を見つめるネパール、アフリカ、ドイツ、アメリカ、ベトナム、中国の黒い顔、白、黄色の顔の面々。主権側の整然とした雰囲気、発言内容、なんと世界各国にむかって日本の女性の代表として、まことに誇らしくおもえたことか。胸一ぱいできいた。しっかりとシャッターをおした。参加者は室にあふれ、一二〇—三〇人はあったか。

も一つ、和田さんから色紙をもらって折鶴をつくり、ポケットに入れて歩いた。ゼッケンをつけて歩いたので一日の中に二、三人から呼びとめられて、背中をうつさせてといわれた。この日黒い肌の方に言われたので、折鶴を「ピースバード」と差し出した。大きな笑顔と握手の手が出された。一つおじぎをし

女と男の新世紀

中嶋里美

今度北京で採択された「行動綱領」は女と男の新世紀創造への最高のプレゼントだ。

国連婦人の十年、ナイロビ戦略、北京会議を経て世界の男女平等実現へのプロセスは細部にいたる迄完成した。

男女平等小国の私たちは一所懸命それらを学んで、日々の生活の中でおくれを取り戻し人類の幸福に寄与しなくてはならない、最も深くえぐり出さなくてはならないものは男の中に根をおろしている支配意識、女の中の依存意識であろう。

九月七日、アフリカで今尚一億人の少女たちが受けている「性器切除」を廃止する為の分科会に出た。そして世界ネットワークも作ろうと話合った。事務局はオーストラリア。「女たちが生意気になつては困る」とアフリカ四〇ヶ国で行なわれているこの悪しき「伝統」を一日も早くなくすよう働きたいと思っている。詳しくは『喜びの秘密』（アリス・ウォーカー著、柳沢由実子訳、集英社）をお読み下さい。

☆家庭科の男女共修をすすめる会の近江世話人、駒野世話人、樋口世話人は、別のツアーでNGOフォーラムに参加しました。

て笑顔を撮させてもらった。言葉は通じなくても、ピース（平和）で心が交った。とてもうれしかった。

世界の女性はずばらしい

上海・朝市で抗日の眼差しに

西原典子

さまざまな民族衣装を身につけ、肌色の違う世界の女性とともに、ワークショップやピクニック、アジア友情テントと行動したのは三日間でしたが、さすがに、世界女性のエネルギーと行動力はすばらしく、今回の大会テーマ「平等・開発・平和」の実現も、決してユメではないと思いました。中国の受け入れ態勢には少しいらだちをおぼえましたが事務局の方々の並ならぬご努力には頭がさがりました。Fさん・Nさんはそれぞれ寸暇を惜しんで、「従軍慰安婦」への謝罪と国家補償の署名活動をされ、中国のマスコミが感謝をこめて取材し、放映までされたときいています。Kさん発案のゼッケンによるキャンペーン活動は、各国の写真に納まりました。ギクッとしたのは上海のホテル近くの朝市で、近くから鋭い眼差しで凝視されていました。抗日感情のまだ癒やされていない草の根の中国の一面を知らされました。

フォーラムの日本からの参加者は約五千人と言われていますが、自治体単位の参加が目立っていました。近江世話人は東京都中野区からの参加でした。

95NGOフォーラムに参加して

近江眞理

中野区派遣事業の区民代表として、95NGOフォーラムに参加しました。公募の10人のグループで、学習や議論を積み重ね、各々の問題意識をもとに、ワークショップを開くことにしました。ワークショップでは、日本の女性のライフサイクルをイラストのチャートで表し、働き続ける女性をサポートする制度の不十分などを報告しました。多くの国からの参加者があり、活発に意見交換が行われ、高学歴と言われている日本女性がなぜ専業主婦になってしまうのか、日本の男性や子供はどの程度家事に参加しているのかなどの質問が出されました。そんな中で、「制度が整っても人々の意識が変わらなければ社会は変わらない。日本では男女平等教育はどう行われているのか。（USA）」という質問があり、差別撤廃条約に関わって昨年度より高校でも家庭科が男女共修になったことを報告し、21世紀を生きる若い人達の意識の変化に期待したいということが話し合われました。

夏の各集会から

家庭科教育学会シンポジウム

茗溪学園 望月一校

この7月1日福島で開かれた家庭科教育学会の「21世紀を拓く家庭科教育の創造―男女が学ぶ高等学校家庭科教育の実践から―」というシンポジウムに出席してきた。シンポジストが私を入れて3人、コーディネーターが一人コメンテーター一人の構成である。このまとめは学会誌にのる予定であり、全体のまとめができる技量もないのでここでは私自身がいたかったことを要約し報告に代えたい。

家庭科教育とその目標では教科観と教育目標が問われた。私は家庭科という教科を青年期教育としての家庭科ととらえている。

①アイデンティティの自己選択を促す教科生徒が親と自分、性と自分、世界と自分の関係を問い直し新たな自分を立てて社会参加できることを目標とする。

②生活者としての自立を促す教科 生活的

95 We フォーラムに参加して

浅井由利子

8月5日～7日、震災から半年あまりたった神戸で行われました。

分科会「わくわく家庭科ワークショップ」に約30人が参加。『家庭科をおもしろくする本』（グローバル・エデュケーションセンター）の中から、家族・家庭とはをテーマにグループワーク。モロッコの大家族の食事風景の写真を見て、日本の家族との違いについて話し合ったり、共働き家庭の親子を演じるロールプレイ。家族にとって大切なことは何かについて項目をあげ、優先順位をつけるランキングなどを体験しました。先生から生徒へ一方的に知識を教えこむパターンより、生徒が主役となって感じ、考え、意見を述べ、他人の意見もきく形のほうが楽しく、魅力的だと実感。しかし一方で、最後は、言いつばなしではなく、正しい情報を教えてほしいという意見もあり、授業のまとめをどうするか等、教える側の発想の転換の必要性を感じました。

自立に必要な知識と技術を身につける。いまの生活スタイルの問題点を知り新しい生活スタイルを作ろうと人や物に働きかけられる力をつける。家事をこなす個人の工夫で家庭生活を充実させるのではなく社会との関連で生活をとらえ、人々と協同して生活を充実させていくことである。それには生徒の生活観人間観 世界観 職業観を広げることが必要だ。

特に家庭科のなかでは生徒のジェンダー観を授業でぶつけあわせ新しい時代に生きる青年を生み出したい。

第30回家教連夏季研究集会

八月一日から三日まで熱海で開催されました。今年は家庭科の男女共修実施二年目を迎えて、形の上では全国大部分の高校で共修の授業に取り組んだ上で、種々の問題が出されました。

高校全体会・分科会（参加者約百七十名）

1、施設・設備・教師も含めた条件の不十分さの実例が多数だされました。

2、学校五日制の完全実施に伴って、4単位

分科会「一頭まるごとのフリス（原毛）が教えてくれるもの」には30人以上が参加し、羊の解体、皮なめしの様子のスライドやまだら染めの実演を見せてもらい、参加者はひざの上で毛を少しずつとって紡ぐことに熱中。

羊の毛を見ればその頃の羊の生活がわかり、放射能汚染の問題にまで発展させて考えていく。ぜひ授業に生かしたいという声も多くありました。

第41回日本母親大会を垣間みて

和田典子

ことしの大会は、東京、横浜、川口の三地域の会場で、8月19日と8月20日の両日ひらかれました。

第一日めは日本教育会館ほか六会場で30分科会が、川口総合文化センターでは問題別集會が持たれ、どの会場も満員の盛況でした。二日めの全体会は、横浜の国際会議場で、記念集會は日比谷公会堂で、戦後五十年平和を考える記念集會として特設され例年を上まわる参加者であったと、ききました。何しろ数万人というマンモス集會ですから

必修があぶないの話もできました。また「一人一人の能力・適性に応じた教育」に応える形で、コース制や類型をおく高校の増加、普通高校から総合制高校の転回を上から強制されている高校、地域の父母と共に反対署名を提出する等で斗っている学校の報告等がありました。最後に「男女共学必修の家庭科が教育課程に根づくために、今後とも取り組みを強めましょう」という表題の決議文を参加者一同で採択しました。

3、共修が当然となり、共修のための授業展開という言葉はなくなり、何をどう教えるかの学習そのものについての討議がすすめられました。

中学校全体会・分科会（参加者の一割が学校自体が別学とアンケートに記入した実態がある）

全面共学が定着しない理由として、家庭科担当者が体育教師という学校、三年生が週二時間となり、時間不足の為別学にせざるを得ない、技術と家庭の二本建が問題といういろいろだされたが、授業づくりや評価に時間が多くかけられたため、男女共学のための具体的な方策は話しあえなかった。

文責 磯部 榎本

全体状況を知るには「大会記録」を読んで頂くほかありませんが、現在国民がかかえる総ゆる問題が女性の立場から提起、討議され、今後のとりくみを恒例の「申し合わせ」としてまとめる、という方式で運営されていました。

また、各会場毎に助言講師が参加する点も受けつがれていました。

筆者が出席したのは、お茶の水、文化学院で持たれた。戦後50年・マスコミの軌跡——良かったこと、悪かったこと、マスコミを国民の手に——のシンポでした。日本ジャーナリスト会議の橋本進氏が司会、シンポジストは塚本三夫、田代早苗、須藤春夫の三氏でした。約二〇〇名の参加者から報道に対して不満や要求が続出しましたが結局「受け手」の積極的参加こそ課題である、との共通理解に至りました。

お詫びと訂正

会報95夏号 11ページ
94年度公立高等学校（全日制）入学生の家
庭科履修状況一覧表で愛知県（誤）は高知県（正）でした。お詫びして訂正致します。

日教組関東ブロック 第10回教師の力量を高める 自主編成研究講座

近江眞理

8月22、23日、第10回関東ブロック自主編成講座が茨城県大洗で開催されました。昨年度から男女共修がスタートしたこともあり、高校の分科会で家庭科の講座がもたれました。実践では、橋本祐子さん（神奈川県大和南高校）の自主編成カリキュラムによる「生活時間の記入」を取り入れた授業と、近江（東京都杉並高校）の家族・家庭領域でグループ研究を取り入れた授業が報告されました。また家庭科の教育条件について篠崎ひで子さん（千葉県成田北高校）からは教員採用および配置を中心に報告がありました。（会報95夏号参照）

共修はやはり順調に進んでいるようで、男子から素朴な質問があったり、授業がとても活発化したことなど各地の様子が報告されました。

交流の中では、生徒数減から学級減、教員定数減と家庭科教員の複数配置が進まない状

況が出されました。東京都では1学年8学級以上の規模の学校から複数配置されているのですが、神奈川県では公立一六六校中、家庭科教員の複数配置は40%で、新規採用も94年7名、95年6名、来年度は0と人的条件が整っていないのが実態のようです。

参加者の中に昨年度家庭科教員養成事業を受け、この4月から家庭科教員になった埼玉の男性教員が2名参加しており男性の家庭科教員は生徒にも好評で授業の様子などを報告してくれました。家庭科教員養成事業には問題がありますが、家庭科の男女共教の一步であることを実感しました。

タイのアグリビジネス 見聞記

柴田栄子

「食料問題と平和を考える」というテーマの家教連主催の旅行のミニレポートです。

バンコクでは飼料会社の紹介でエビの養殖農家訪問。エビ御殿、高密度養殖（70×100mの池から一度に3tの収穫）、人工配合飼料、御殿に住む人、雇われている人……の実

態を垣間見て来た。養殖池の多さや広さは、地上からでは生い茂った草木に遮られて分からないが、クアラルンプールに着陸前に飛行機の中から見た光景には息をのんだ。蛇行している河に沿って四角に区切られた茶色の池が、濃緑の森林の奥から海まで延々と広がっていた。「大地と海が交接する帯状のマングロープ林を破壊して養殖池にしている」ことを一瞬にして理解した。

次はサハ・ファーム社。飼料生産工場や種鶏場、五〇〇〇戸の契約農家を持つ一貫したブロイラー生産の大企業。1分間に二〇〇羽を解体するという作業場は、白衣の人の群。生きた鶏の2本の足が鎖に掛けられ、次の工程は残酷なので視線を遮られ、首と羽がなくなっていく。解体作業は、立ちづくめの単調な流れ作業。終着は串に細肉を刺す所。この社で唯一の日本人という男性の説明では一日一人五〇〇本を八〇〇本にまで高めたという事。私たちを安くなれば喜ぶ集団と見たのか？

エビも鶏も儲かっている側の説明、突っ込んだ質問は避けてほしいとの事情もある中で「働く女性労働者の健康や福利の面での十分な配慮を同性としてお願いしたい」と旅行団長は挨拶されました。

世話人会報告

〈六月十一日〉

いつもの世話人のほかに、鹿児島市の中学校の先生、特手ナツさんが参加され、発送作業を手伝って下さり、直接聞けない鹿児島市の状況などを話して下さいました。

○中学校での男女別学をなくすために、磯部さんが大宮市で行った調査と質問事項案を検討。四・八の会議で発言された葛飾区、長野の方と鹿児島で調査をしていただき、それをもとに再検討することに決定。

○六・二四集会に向けての役割分担。

○北京会議に向けて
加盟団体から五六〇万円分担、会は五万円負担することになった。

NGOフォーラムの会場が千葉県に移されたことにつき、申入れを重ねたが変更することはないとのこと。

○会の活動のまとめに向けて種々の話題が出た。会で作ったパンフ類は郵送料だけ負担してもらえれば無料で送るなど。

〈七月二十二日〉

（半田たつ子）

●北京会議について。連絡会において、ワークショップのアウトラインや参加者の任務が

決定。すすめる会では、教育・マスメディア分野のリーフづくりを担当。分担も決まり内容の検討も行った。

●秋号について。北京会議の報告もあるので増ページ。夏の各集会には、世話人、会員が積極的に参加し、その報告をしてもらう。

●会の今後について。「会の活動は、今年度で終了する。名称は来年度まで残し、その間に資料をまとめたり、財産の処分をする。」という提案があり、世話人各自の意見を述べた。「二十年という重み、その歴史を閉じることは残念。」「共修になっても問題は山積みしている。次の教育課程改訂に向けても会として物を言いたい。」「共修も実現したし、北京会議にも参加できるし、この辺が会を閉じるにはよい時か。」大筋では提案に合意。

秋号にこの件を載せ、会員の意見を求めることとした。

〈八月十二日〉

（磯部幸江）

NGOフォーラムに出席する前の最後の世話人会。その準備状況を話し合うことから始めた。会場変更で参加をとりやめた世話人もいるが、英文のリーフ原案もでき、ゆかたショウの案もできた。他の議題は次の通り。

●秋号の内容の再確認。

●会を閉じるにあたって、活動のまとめに向

けて提案。（18ページ参照）まとめの仕事は北京会議の終了後から着手する。会計は繰越金で不足したらパンフレット会計よりまわす。事務局の渡辺さんにはできたら九六年度まで続けてもらう。

●九六年四月六日（土）に集会を持つ。

●中学校の共学になつてない問題等について世話人からの実態調査が届いている。

（磯部幸江）

〈九月十五日〉

○NGOフォーラムについて

フォーラム全体としても、会として参加したことについても、問題もあるものの、かなりの成果があったと話し合いました。

○活動のまとめに向けて

●集会4月6日の集会の内容について梶谷が提案、いろいろ意見が出ましたが、更に検討して年内に案をかためることにしました。

○資料2これまでのニュース、会報をひとまとめにしたものをつくることも、新しい単行本を出すことには決定。十月から事務局にある会報などの整理をすることにしました。

○95年をふり返る会
18ページのように決めました。

（梶谷典子）

別学が残る中学校家庭科

「技術・家庭科」の共学状況

と課題

磯部幸江

「高校では必修が始まったが、中学校には必修でない学校がある。」と今年四月の学習交流会にて中学校教員からの発言と共に、他の出席者からも同様の指摘があった。本会としても見過ごすことができないので、実態を知るために、各地の世話人や会員に状況の調査を依頼した。(次頁の表参照)

◇一部別学の学校が各地にある

調査の一部をまとめた表からもわかるように、全ての中学校で男女共学の「技術・家庭科」が行われているとは限らない。各地に三年間別学、学年や領域によって分かれる一部別学の学校が存在する。表②のように、一・二年生で必修となっている「家庭生活」「食物」「住居」「保育」となると女子のみで学ぶことが多くなる。その時間、男子は技術分野を学習しているという性別分担を助長する以前のやり方が残されているのである。

このように別学になるのは、学習指導要領によってすべての生徒に履修させる領域と選択の領域を設けたことによる。「選択の領域

については、地域や学校の実態及び生徒の特性等に依りて、どの領域を履修させるかを検討することが必要である。」『中学校指導書技術家庭編(文部省)』とあることから、学校の実態や教師の考え方により別学になることもあるのである。

また、教科の存在そのものの問題として、家庭科は独立した教科でなく「技術・家庭科」という合科として存在していることがある。教員免許は、家庭科と技術科は別々に取得するため、同一教科でありながら担当する先生が途中で交替するのである。家庭科と技術科半分ずつ履修しても、時間数が不足してすべての領域を深めていくのに現場の教師は苦慮している。また違った内容を別々の担当者が教えていても評価を統一しなければならぬという問題もある。そのため、女子のみでも家庭科の内容を多く学ばせたいと考える教師がいて、同じように男子に技術科をと考える教師もいて別学がなくならないのだと思う。

◇教員の採用は、

表などは略したが、今回のアンケートでは、家庭科の担当者についても尋ねた。学校全体の教員の定数があり、家庭科は、正採用ではなく講師であったり、他教科の教員が応援したりしている学校がある。小規模の学校では、家庭科専門がいなくてもある。男女で学ぶ家庭科を充実させていかなければならない時

に、専門外の教員による指導は負担が大きいのではないだろうか。

また技術科教師とのバランスも同率とはならない。そうしなければどちらかの分野に片よりが生じることもあるのである。

◇これからの課題は

家庭科の男女共修をすすめる会などのねばり強い運動の成果で、家庭科は男女で学ぶのがあたり前の時代になった。生徒たちは、当然のこととして受け入れ、市民の支持もある。ところが、教える教師側に、すっきりと共学を受け入れられない状況があると思われる。それらは個々の意識の問題でもあるが、義務教育という大きな制度の中で一人では身動きがとれない問題も多い。何をどのようにしていきたいのか、声を上げる必要性を痛感している。

現場では、様々な問題をかかえながらも、地道に実践を積み上げていく多くの教員がいる。三年間の男女共学家庭科で何をどう教えていくか、少ない時間内での学習計画、すべての領域を学習させるための自主編成などの取り組みを共有していきたい。小中高一貫した内容を作り出す研究も積み重ねていくことも望まれる。

最後に今回のアンケートに協力して下さった方々に感謝。これらに関する情報等、あるいは御意見をお願いしたい。

＜表①＞教師へのアンケート
学習形態(平成7年度)

	学年	共学	別学	一部別学	不明
大宮市19校	1年	19	0	0	
	2年	19	0	0	
	3年	18	0	1	
長野市21校	1年	21	0	0	
	2年	21	0	0	
	3年	4	0	15	2
鹿児島市12校	1年	12	0	0	
	2年	12	0	0	
	3年	5	2	5	
岐阜県24校	1年	24	0	0	
	2年	24	0	0	
	3年	18	3	3	

＜表②＞教師へのアンケート
領域別学習形態(平成6年度)兵庫県54校

領域	クラス	女子のみ	男女別	その他	不明
家庭生活 食物	50		3	1	
被服	10	24	2		2
住居	8	5			
保育	23	16	1		2

(姫路短期大学同窓会 家庭科の男女共修をすすめる会 会員による調査より)

＜表③＞教師へのアンケート 1995・8・2
家庭科教育研究者連盟夏季集会
中学校分科会参加者による回答
家庭科の授業について 回答者70名

3年間	一部別学	教員が別学	記入なし
41	8	7	10

＜表④＞高校生へのアンケート
宮城県・女子校 出身中学校37校

形態	・男女共学で内容はすべて同じ (34校) ・1年だけ別学であったが、内容は同じ (1校) ・別学で内容も男女別 (2校)
授業の割合	・同じ割合 (32校) ・家庭科に重点がおかれた (1校) ・技術科に重点がおかれた (4校)

兵庫県・共学校

姫路市の高校 出身中学校16校	・クラス単位共学 (4校) ・一部別学 (12校)
加古川市の高校 出身中学校22校	・クラス単位共学 (20校) ・一部別学 (2校)

※表作成:磯部

マス・メディアは 必修家庭科を どう取り上げたか

半田たつ子

「高校で家庭科が男子も必修になって一年余り。男女が一緒に授業を受けるのは当たり前になってきた」。朝日新聞（東京）6・21付の記事は、この文章で始まる。しかし、「男の家庭科教師、まだ10人」との見出しで、北海道の江口凡太郎さんの授業、日本女子大通信教育課程で免許を取り、採用試験を受け直して家庭科教師になった長崎の北達勝久さん（元社会科教師）の場合を紹介する。続いて「男女共教」の必要を訴える大阪の南野忠晴さんの意見と、男性が家庭科の免許を取るための方法、その門の狭さ、文部省教職員課の調査の後れなどを載せている。

◇
毎日（大阪）7・5付は、日本家庭科教育学会で報告された京都教育大加地芳子さんの調査を紹介する。見出しは「高校の家庭科男子校でも好評のようですが」、「半数が実習室などなく、無免許の非常勤講師も、確保に四苦八苦」だ。同調査は昨年末、近畿二府

四県の男子が三分の二以上を占める高校を対象に行い、約六割が回答したもの。

男子生徒に関心の高いのは①調理実習②性の問題③食品添加物の順で、高齢化社会、家族関係、栄養素などへの関心は低かったと。

◇
朝日の写真は、コメの授業で教材を配る江口凡太郎さん、毎日、楽しいエプロン姿の聖パウロ学園光泉高（草津市）の授業風景。「こんな調理実習がすべての男子校に出来れば良いのだが」とのコメントがある。

◇
テレビでは、六月十日NHK「いっとうっけん」（関東エリア）で「このごろの家庭科」として取り上げた。コンパクトに、必修家庭科のねらいや、授業内容、生徒の反応などを紹介し、家庭科の本質を理解できるいい番組だった。これらの記事や番組作りには、和田さんや私が陰で協力しているが、担当者の理解は格段に進んだと思う。

◇
「戦後五十年」「女たちの10年」のような企画ものでは取材もあった。ジャパンタイムスは「A Half-Century of Change」として、石垣りん、増田れい子、江原由美子氏らの歩みと意見と共に私の場合を取り上げ、家庭科の男女共修運動を紹介した。見出しの一つは、

“Sexual equality sure, but please serve tea”である。

◇
「女たちの10年」は、時事通信社配信のものだが、家庭科の共修運動について取材にきた記者が、ついでに話した男女混合名簿のほうに興味を持ち、記事はそちらが主体になってしまった。最後に家庭科の男女共修について述べているが、「家庭科なんてカレライスでも作っていいじゃない」と、公的な場で学校管理職が堂々と吐かれるのが一方の現実で、「教育の男女平等の前には、教師の意識という厚い壁が立ちわだかまっている」と結ぶ。

◇
マス・メディアの扱い方を二十一年前運動発足時と比較すると、必修家庭科がニュースバリューを失ったことを感じる。もはや、これは「当たり前」なのだから。現実、未解決の重要課題をかかえているのだが、それは地味で、マス・メディアの興味をひき難い。「教師の意識」も、目が覚めるほど変わってはいない。「見えにくくなった問題」を決するには、家庭科教師の力量が問われる。いい授業をして、生徒の目を引き、その親を変える、必修の授業が家庭科のイメージを一新する。マス・メディアが、そこに興味を抱いて報道する……ことをこそ、願っている。

文部省、高校長協会のうごき

●職業教育課長は木曾さんから池田さんに
七月の人事異動で、文部省初等中等教育局職業教育課長は、木曾功さんから池田大祐さんになった。池田さんは、教育助成局視学官兼総務庁青少年対策本部参事官体力づくり担当だった。

●中教審の小委員会のメンバー決まる

中央教育審議会の第一小委員会は「今後における教育の在り方及び学校・家庭・地域社会の役割と連携の在り方」と「一人一人の能力・適性に応じた教育と学校間の接続の改善」について、第二小委員会は「国際化、情報化、科学技術の発展等社会の変化に対応する教育の在り方」について、すでに決まった委員と新たに任命された専門委員によって審議が進められる。

第一小委員会の委員と専門委員。委員は、市川芳正、薄田泰正、河合隼雄、河野重男、国分正明、高木剛、田村哲夫、永井多恵子。専門委員は、油井誠（静岡県島田市立六合中教諭）、佐々木初朗（盛岡市教委教育長）、薩日内信一（東京都渋谷区立大向小学校長）、里中満智子（漫画家）、末吉裕郎（社団法人

全国子ども会連合会常務理事）、那須原啓子（茨城県PTA連絡協議会母親委員長）、蓮見音彦（東京学芸大学長）、増井俊明（東京都立九段高校長）、牟田悌三（俳優）。

第二小委員会。委員は、江崎玲於奈、川口順子、木村孟、小林善彦、坂元昂、俵万智、土田英俊、根本二郎。専門委員は、青木保（大阪大学教授）、河田耕一（埼玉県立伊奈学園総合高校教頭）、小澤紀美子（東京学芸大学教授）、サムエル・M・シェパード（日米教委事務局長）、中進士（東京都港区立青山中学校長）、山極隆（富山大学教授）。

有馬会長と鳥居副会長は両小委に随時出席するほか、委員も適宜出席し、自由に発言できることになっている。

（委員の所属は、会報95夏号参照）

●全国高等学校長協会で、4単位、弾力化？
校長協会の総会と研究協議会が五月に開かれ、その研究協議会の中で、家庭科に関わる報告がいくつあった。

まず、家庭部の吉田勲さん（東京・上野忍岡）は、家庭科教育の現状と今後の課題について、94年度調査によると公立高普通科では「家庭一般」の履修が74%、学習態度は「比較的良い」が男子56%、女子47%で、「特に変化なし」の各22%、26%を大きく上回っていると報告している。

また、教員配置については、普通科共学校を見ると一人配置校（37%）と二人配置校（31%）が中心。実習助手は無配置校（70%）、一人配置校（12%）。家庭科教師の受け持ち時間は、週18時間以上が8%もあり、吉田さんは、「実験実習を多く伴う教科だけに14時間程度に抑えられるようにしたい」と改善を促している。

次に、教育課程研究委員会の岩沢邦明委員長（東京・墨田川）は、94年度に実施した記述式アンケート調査の結果に基づいて報告している。

それによると家庭科男女必修では、大部分の学校が4単位としているが、一部の工業高校などでは、資格取得のため専門科目を多く履修する必要があったり、学科の特色を出すために実験・実習を多くしているなどの理由で、3単位を認めているとのこと。

教員確保については、現有の専任講師で充足し、非常勤講師で補充する学校がほとんどだが、非常勤講師の確保は容易でないという。ある県は家庭科教員の確保策と過員の解消を兼ねて、新採用によるだけでなく、過員の見込まれる教科の教員を中心に大学で単位を取らせたり、教育研究所で特別に研修を受けさせて家庭科を担当させる施策を実施していた。施設・設備は工業高校や男子校では不十分で、

95年度を目標にするところがほとんど。

大学進学希望者の多い普通高校では、受験科目の授業時間を増加させているのをはじめ、コース・類型を設置したり受験にかかわる選択科目を置いている。このため、全体として履修単位数が増える傾向にあるが、必修科目の単位数増加が重荷になって、授業時間数削減が難しく、生徒の負担が過重になるケースが多い。岩沢さんは「家庭科の4単位を含め必修科目の単位数の弾力的な取り扱いが必要である」と述べている。

（「内外教育」より 大西 歩）

95年をふりかえる会へどうぞ

食事をしながら一年の運動をふりかえり、これからのことを話し合いましょう。

◇

・とき 12月23日（土）午後6時半

・ところ 渋谷道玄坂「じょあん」

☎〇三―三四六四―七一六三

・おかね 料理五千円（飲物代等別）

◇

申込は12月10日までに梶谷へ

〒155 東京都世田谷区代沢一ノ三七ノ八

☎〇三―三四一四―二〇五二

活動のまとめに向けて

梶谷典子

95年度の運動方針として「二十年間の活動をまとめる準備に入る」ことがきまりましたが、総会では「いつまで活動するか」「どうまとめるか」というところまでは話し合いませんでした。

◇

「全国の中学・高校で家庭科の男女共修を実現させる」という「会」の目標は、制度的には96年度に達成されます。もちろん、実態としてはまだまだ問題があります。名目だけ家庭科をやることにして実際には他教科をやったり、内容に問題があるなど、運動が必要なくなったとは言えません。けれどもこれからは、広く市民の力を結集することよりも、もっと専門的な運動が必要でしょう。「家庭科の男女共修をすすめる会」の運動はここでしめくくつてもよいのではないのでしょうか。

そこで、次のように提案します。

☆95年度いっぱい（96年3月31日まで）は、

運動方針の通り活動を続けます。

☆96年度（97年3月31日まで）は最終年として次のような活動を行います。

1、96年4月6日に最終の総会と「会」の運動を総括し、共修家庭科の未来を展望する集会を開く。

2、会報は4月6日の総会、集会の報告を中心とする96夏号と、最後のまとめとなる97春号の2回だけ発行する。

3、会「の運動を総括する資料をつくり、これまでつくったすべての資料を整理し、必要なところに贈呈、配布する。

4、新たな問題が生じた時は、関係方面への働きかけなど、必要な行動を起す。

5、国際婦人年連絡会の活動には参加する。

6、会費は集めず、繰越金によって活動する。

◇

こうした重大なことは、当然96年度の総会で決定することになりますが、その前に会員の皆さまからご意見をいただきたいと思ひます。

事務局あてに郵便で、あるいは世話人に電話でご意見をおしらせください。